

タ
オ
テ
イ
エ
・
ト
ウ
ア
ン

昔々、文明がちょっとだけ発達した頃。

治水に長け、民達に慕われる王が統治しているある国。

一見平和なその国にも、多少のいざこざは有るのでした。

第一章 狼使い

「やあ、この国は随分と活気に溢れてるね」

腰の高さほどの大きな銀色の狼を連れた黒衣の少年が、賑やかな街の市場を見渡しながらそう言うのと、狼が口を開いた。

「この国の王、兎と言ったかな？」

兎王は大きな河から水を引っ張ってきて、国中が水に困らない様にしたんだと。

だからこの国では農業がし易い。

それでこれだけ活気があるんだろうよ」

狼が喋っているのに気がついた市場の人が何人か驚いて少年達を見ているが、当の本人達はそう言った事には慣れてしている様だ。

狼が確認する様に少年に問う。

「この街にも、ツーヨウが解決しないといけない様な案件はあるのか？
見た感じ、何かに不自由している様な奴は見当たらないが」

「リエレンは甘いなあ。」

こういう風に人が集まる所にこそ、僕の仕事はあるんだよ」

ツヨウと呼ばれた少年はにまりと笑ってそう答え、銀色の狼、リエレンと共に、背負っていた荷物を下ろし、大通りの空いている場所に店を出す準備をする。

木で出来た小さな組み立て式の机と、その上には赤い布を敷き、小袋に入れられた様々な玉を並べている。

ツヨウは店の前を通りがかる人に、玉のお守りなどどうですか？等と言って人を呼び、興味がありそうな客には、自信たっぷりですらすらとお守りの効能なども説明する。

彼の売るお守りは、いくら売れているこの国の国民から見ても、高価な物だ。

それでもツヨウは言葉巧みに言いくるめ、身なりの良い裕福そうな客に幾つかお守りを売る事が出来ていた。

店を出してお守りの販売を始め、偶に胡散臭がっている客に嫌味を言われたり等もしたが、順調に売り上げは上がり、日が暮れる頃には、財布から溢れんばかりに、お金として流通している小さな貝が集まっていた。

「いやあ、随分と珍しいお金まで稼げちゃって良かったよ」

「ツーヨウの売り口上は相変わらずだな」

少し呆れたようなリエレンの言葉に、ツーヨウは少しぼさぼさになった背中の毛並みを撫でながら、少し意地悪そうに言う。

「え？ リエレンは儲からなくて野宿したい？」

「俺は野宿でも問題ないが、お前が辛いだろう。」

道中ずつと野宿だったからな」

「気い使わせちゃって悪いね。」

じゃあ宿を取りに行こうか」

なんだかんだでリエレンは、自分の事を心配してくれているのだなと思いつつ、暗い夜道を歩いて宿を探している道中、ツーヨウは異変と緊張の気配を感じた。

何処からか叫び声が聞こえるのだ。

やれやれと言った顔で、ツーヨウは面倒くさそうにリエレンに言う。

「ねえ、ちよつと叫び声の元に駆けつけといてくれる？」

僕ちよつと準備してくる」

「わかった」

こそこそと細い路地に隠れるツーヨウに背を向け、リエレンは銀色

の毛をなびかせながら、叫び声の元へと駆け足で向かう。

すると目に入ったのは、柄の悪い男複数人が、胸ぐらを掴んだり拳を振り上げたりなどして、気弱そうな小柄な男を囲んで恐喝している所だった。

「お前達、何をしている！」

側に寄ったりリエレンがそう牙を剥いて大きな声を上げると、男達は驚いて騒ぎ始めた。

「なんだ、狼が喋ってるぞ！」

「狼だろうと喋れる奴に見つかったからには始末しとかないな」

そう言った男達は、その内一人を恐喝されている男の所に置いたまま、リエレンを囲む。

唇をまくり上げ、唸り声を上げるリエレン。

一見リエレンにとって不利に見える多勢に無勢ではあるが、リエレンの実力であれば、この男達に太刀打ちは出来る。

しかし、ここで迂闊に噛み付いたりしたら、自分を連れているツーヨウまで何も知らない街の住民に警戒されるだろう。

男達が囲みを狭めてリエレンに殴りかかる。その時だった。

「ハァイ、お兄さん達何やってるの？」

すぐ側の家の屋根の上から声が聞こえ、男達は一斉にその声の方を向く。

するとそこには、鈍く月光を照り返す青銅製の、顔の半分を覆っている獣を模した仮面を付けた少年が一人。

少年は、懐から幾つかの玉を取り出し、男達の方へと投げつける。

すると地面に固い音を立てて当たった玉が、まばゆい光を放った。

突然の事に目を覆って戸惑う男達を、少年は音も立てない素早い動きで一人ずつ殴り倒し、瞬く間に男達の腰紐で全員を縛り上げる。

「リエレン、ちょっと兵隊さんの詰め所行って呼んできて」

「わかった」

リエレンにお使いを頼んだ少年は男達を積み上げ、その上に座って恐喝されていた男をまじまじと見つめながら、確認する様にこう言った。

「大丈夫？ お金取られてない？」

取られてたんだったら今の内に回収するけど？」

するとその男は、自分が助かったのはわかったようだが、正体のわか

らない者を目の前にしている緊張で、オドオドしながら答える。

「あの、何とかお金は取られずに済みました。有り難うございます。あの、それで、宜しければお名前を……」

その言葉に、少年はこう名乗った。

「僕の名前？」

僕は『タオティエ』っていうんだ」

軽く言われたその名前を聞き、訊ねた本人と下に積み上がっている

男達は驚きの声を上げる。

「タオティエだって？」

「なんてこった、噂で聞いた正義の味方じゃ無いか。

実在したのかよ！」

「ちょっと、人の事勝手に非実在にしないでくれないか？」

不満そうな男達と、実在しないものだと思われていたのが不服そうなタオティエがそんなやりとりをしている間にも、リエレンが武器を持った兵士を連れてきた。

恐喝集団が引っ立てられていった所で、被害者がタオティエに向き直り、改めてこう言った。

「タオティエさん、本当に有り難うございました。

どうお礼をしたら良いのか……」

何度も頭を下げるその人に、タオティエは手をひらひらさせながら答える。

「お礼なんて別に良いんだけどね。

でも、どうしても言うんだったら、安く泊まれる宿を教えてくださいな
い？

「追いはぎ宿じゃ無い所」

「は、はい！ 勿論です！」

それから少しの間、タオティエはその場所から少し離れては居るが、
安く泊まれる安全な宿を教えて貰っていたのだった。

タオティエはリエレンを連れて、宿へと向かう道中、こっそりと人気の
無い路地へと身を隠した。

青銅の仮面を外すと、その仮面は音も立てずに丸みを帯びて、腕輪へ
と変わる。

それを腕に付けるのは、先程までタオティエと名乗っていた少年、ツィー

ヨウだ。

ツヨウは誰も見ていないのを改めて確認した後、路地から出てまた宿へと向かう。

そのさなか、リエレンがツンとした声でツヨウに言う。

「別に人助けは変身しないでやっても良いんだぞ」

「無理無理。」

変身した方が力出せるし、何より変身しないと絶対お金取りたくない」

「この守銭奴め」

「ごめんなさいね、お金大好きなんだ」

ツヨウは、天性の才能を『鏡樹娘々』という、人なのかあやかしのかわからないモノに見いだされ、世に蔓延る悪を少しでも倒して欲しいと、そう言われて『タオティエ』へと変身する能力を授かった。

ツヨウとしてはお金にならない事は避けたいのだが、鏡樹娘々は意外と強引で、あれこれと口論をした結果、ツヨウは説き伏せられてしまい、タオティエとして人々を守ると言う仕事を押しつけられてしまった。

その事を思い出して、改めてめんどくせえな。と思いながらもツーヨウとリエレンは宿に辿り着いた。

小さく質素ではあるけれど、教えてくれた男曰く、ここなら安心して泊まれるし、素朴で少ないながらも美味しい食事が出るとの事だったので、人の良さそうな宿の店主と少し話した後、割り振られた部屋へと入って荷物を置いて身を休めた。

店主自ら部屋まで持って来てくれた夕食は、花巻と刺激的な香りのする醬。

「どうぞゆっくりおくらぎ下さいませ」

「はい、どうも有り難うございます」

笑顔で店主に返事をし、ツーヨウは花巻を一口大にちぎって醬を少し付ける。それを口に含むと、柔らかくほんのり甘い花巻の味を、花椒の効いた醬が引き立てていてこの上なく美味しい。

「ヤバイ、マジで美味しい、ヤバイ」

一方のリエレンも、店主が用意した料理を食べている。

干し肉をほんの少し塩を足した湯で茹でた物なのだが、その塩加減が

どうやってリエレンの好みを探ったのかと疑いたくなる程に絶妙だった。

「ツヨウ」

「何？」

「この宿は当たりだ。暫くここに泊まろう」

「うん」

お腹いっぱいとはまでは行かなくとも、美味しい料理を食べたツヨウとリエレンは、安らかに眠りについたのだった。

そして翌日。

用意された食事は特に見た目代わり映えのしない、さらりとした粥だった。

しかしこれもどう味付けをしているのかわからないけれど、とにかく美味しい。

美味しい食事に安全な寝床。ツヨウもリエレンも、すっかりその宿が気に入ってしまったのだった。

第二章 呪術師

ツーヨウとリエレンがその街にやってきてからひと月程。

ツーヨウとそのお守りの噂は良くも悪くも色々と尾ひれが付きながらも広まっていた。

『本当にあのお守りは効くのか？』『随分とがめつい小僧だ』『このお守りのおかげでこんな良い事がありました！ 実に幸福です！』『等々。そして、それと同時に囁かれている噂。この街に最近タオティエが姿を現す様になったと言う事も広まっている。』

今日も大通りでのお守りの営業を終え、机を片付けている所に一人の、小柄で貧しそうな服装をした少女がやってきた。

「あの、最近噂のお守り屋さん……ですよね？」

人違いだったらと言う事を考えて心配しているのだろう、オドオドと掛けられたその言葉に、ツーヨウはどうしたのだろうと思ひながら返事を返す。

「最近噂ってなると、僕だと思ふけど、何か用です？」

すると少女は、ツーヨウの事を見つめ、震える声でこう言った。

「あの、病気が治るお守りって有りますか？」

「病気？」

ツーヨウとしては、お守りとして玉を売っては居るけれど、実の所確実な効果があると思つて売っている訳では無い。

なので、どんな症状かはわからない、わかつたとしても、確実に病気を治すお守りという物は持っていないというのが本音だった。

けれどもそれを口にせず、ツーヨウは少し腰を屈めて視線を合わせ、少女に優しく問いかけて事情を訊く。

すると、どうやら彼女の兄と弟が病に倒れ、なかなか治らないという事だった。

「成る程ね」

顎に手を当てて少し考えた後、ツーヨウは少女に言う。

「それだと、お守りよりもお祓いをした方が良いかもしれない。

お金を払ってくれるなら、僕がお祓いしてあげるよ」

「ほ、本当ですか！」

そう少女は声を上げたが、すぐに俯いてしまう。

「でも、実は、私の家は余りお金が無くて、呪術師さんに払えるだけの

……」

「お金無いの？」

つまらなそうなたーヨウの言葉に、少女は申し訳なさそうにして頷く。

貰える物を貰えないのだったら、これ以上かかわるのは良く無いとつーヨウが思ったその矢先、リエレンが思い立ったように少女に言った。

「お金じゃ無くて、玉は無いか？」

「玉……ですか？」

玉なら、沢山有ります」

一体何のことだかわかっていない少女の答えに、リエレンはつーヨウの方を向く。

「だよ。」

どうする？ 金の代わりに玉を支払って貰うか？」

リエレンの言葉につーヨウは、それだ。と言う顔をして手を叩いて少女に言う。

「そうだね。玉は僕も欲しいし、どんな玉が有るかを見せて貰った上でお祓いをするかどうかを決めさせて貰うよ。」

それで良い？」

ツィヨウの言葉に、少女はまた頷く。

そうして、ツィヨウとリエレンは少女の家へと行く事になった。

少女が住んでいると言う小さな家に着き、少し立て付けの悪い扉を開けて貰うなり、ツィヨウは異変を感じ取っていた。

家中に、黒く覆い被さる物が蔓延っているのだ。

少女はそれに気付いていない様で、ツィヨウ達を家の中へと入れる。

それから、早速家に有る全てという、色とりどりで様々な大きさの玉を、ツィヨウの前に広げた。

「へえ、なかなか良いのが揃ってるじゃ無い」

ツィヨウは広げられた玉の中から、この中から特に、質の良い物を三つ少女に選ばせる。

少女は迷う事無く、ツィヨウが判別できる範囲では、的確に質の良い玉を選び出した。

「この三つが、この中でも特に良い玉です」

「君凄いね。」

この水準で玉を並べられたら、慣れてる僕だって選ぶのに時間が掛かるのに」

思わず感嘆の言葉を口にするツーヨウに、少女は照れたように笑ってこう答える。

「玉を見る目だけは確かだって、玉を売りに行ってるお父さんに褒められた事が有るんですよ」

その説明に、なるほど、玉を売るのが生業としているのかと、ツーヨウは少女の鑑定眼の理由に納得する。

それから、この三つの玉を貰う代わりにお祓いをする、そう少女に告げ、玉を懐に入れた。

少女の弟と兄が寝かせられている部屋に行くと、そこには随分とやつれた様子の少年と男の二人が横たわっていた。

その部屋の中で、ツーヨウは香になる小さな木片を皿の上に乗せ、火打ち石で火を付けて焚く。

皿の上から細く、揺らぎながら立ち上る煙。

馨しい香の煙が部屋を満たした所で呪文を唱え始めると、家の中に覆

い被さっていた物が、蠢き、密となりツーヨウに襲いかかろうとする。呪文を唱え終わったツーヨウは、すかさず叫ぶ。

「リエレン！ 今だ！」

その掛け声に、リエレンは遠吠えを上げる。

すると黒いもやの様だった物は、すっかりと姿を消してしまった。

それから暫く、少女の弟と兄の様子を見ていると、二人が何が有ったのかわからないと言った言った顔で起き上がった。

「一体今まで何が……」

暫く寝たきりだったという弟と兄が起き上がったのを見て、余程安心したのだろう。少女は泣き出してしまふ。

そんな状態で少女に状況を説明しろというのは難しいので、ツーヨウがざっくりと少女からお祓いの依頼を受けたという説明を兄の方にした。

何度も頭を下げ礼を言う兄に、ツーヨウは機嫌良く貰う物は貰ったからと、そう返す。

「こっちも良い玉を貰えたんでね、悪い仕事では無かったですよ」

「そうですか、それにしても有り難うございました。

マオ、お前はこの人にお礼したか？」

兄に声を掛けられた少女、マオも、ツーヨウ達に何度も頭を下げ、お礼を言う。

それから、支払いが玉だけというのも気が引けると言う事で、マオの兄から少ししながらも干し肉を分けて貰ったツーヨウ達は、宿へと戻っていった。

宿に戻って食事をし、くつろいでいる所にリエレンが言った。

「こんな街でも案外お前が必要な案件は有るんだな」

「光が強い所には、より暗い影が出来るもんだよ。」

ああいう仕事の方が儲かるから、僕ちゃんタオティエよりも呪術師の仕事が多い方が良いなあ〜」

「全くお前は……」

相変わらずな守銭奴ぶりに呆れるリエレンを余所に、ツーヨウは先程マオから貰った玉を眺めている。

タオティエとして悪を退治する時には、いつも玉を使う。

玉と言っても様々な物が有るので、その時々で選んで使うのだが、玉を使って術を発動させると、その玉は消え去ってしまう。

だから、ツーヨウがタオティエとして活動する為には、玉が必要不可欠なのだ。

一応お守りとして販売している分の玉も多数有るが、それとタオティエをやっている時に使う玉とは分けている。

お守りとして販売している分の玉は、買った人の守りとなる様なまじないを掛けてしまっているので、人を攻撃する様な局面では使えなくなってしまうのだ。

何はともあれ、なかなか上物の玉を手に入れたツーヨウは上機嫌だ。

「んふふ。この玉は私蔵しておこうかな」

そんなツーヨウに、リエレンが言う。

「私蔵する私蔵すると今まで何度も聞いてきたが、結局いつもタオティエの時に使ってるじゃないか。」

今回ののは本当に私蔵出来るのか？」

その言葉に、ツーヨウは苦笑いをする。

「うゝん、やっぱ切羽詰まったら使っちゃうかも」

「その玉を使わないで済む様に、明日玉の市場にでも行くか？」

「そうだね、そろそろお守り用の玉も買い足さないといけないし。」

「じゃ、明日早くに行ける様にそろそろ寝ようか」

リエレンの言葉に、ツィヨウは早速寢床に横になる。

リエレンもその傍らに伏せ、眠りについたのだった。

翌朝、街から少し離れた玉の市場に行くと、様々な玉が並んでいた。

ツィヨウは機嫌良く色々な玉を眺め、あれこれと買い物をしていく。玉の市場を回りながらそうしている事暫く、ツィヨウの手元には、売っても使っても暫く持つだろうと言うだけの玉が、袋入りで握られていた。

ふと、思い出したようにツィヨウが呟く。

「やっぱマオちゃんの目利き凄いなだな。」

これだけ玉の集まった市場でも、あれだけの玉が殆ど無い」

「あれだけの玉には凄い値段付いてるしな」

「マオちゃんの家、あんまお金無いって言ってたけど、ちょっとあの玉貫っちゃったのはやり過ぎだったかな？」

少し気まずそうなツーヨウの言葉に、リエレンは目を細め、にやりと口元で笑ってこう言う。

「ほう？ 守銭奴でも取り過ぎて心配する事が有るのか」

「僕ちゃん善良な守銭奴ですからあゝ？」

「今からでも返しに行つて良いんだぞ」

「やだ」

そんな話をしながら、ツーヨウとリエレンは市場を後にした。